シェアしたくなる教養メディア

文藝春秋digital

2019年11月スタート

- 創刊97年目の月刊誌『文藝春秋』のデジタル・サブスクリプションサービス

- 月額900円で特集記事は全て読み放題（※掲載されない記事もあります）

- 課金システムを含むCMSは自社開発せず、メディアプラットフォーム「note」を利用している

・「月刊誌のデジタル化」の最適解は？

・「文春オンライン」ではなぜダメだったのか

・なぜシステムの自社開発を行わなかったのか

- 「文藝春秋がnoteでサブスク」になるまで
- 深津貴之さんとの出会い
- 文藝春秋が求めていたこと
- note社長・加藤貞顕さんとの縁

noteをはじめました。
加藤貞顕

すこしだけ歴史の話をします。

その昔、菊池寛というクリエイターが、クリエイターによるクリエイターのためのメディアがほしいということで「文藝春秋」という雑誌を立ち上げました。そして、たくさんのクリエイターが集い、作品を発表しました。

雑誌を続けていくと、作家ごとの作品がたまっていきます。それらをまとめたのが単行本、つまり「本」です。「文藝春秋」からは、すばらしい本がたくさん生まれました。紙の時代は、クリエイターを集めたメディアとして雑誌があり、個人のためのメディアとして単行本があったのです。

「noteでサブスク」よかったこと

・安価で課金プラットフォームが持てる

・新しい才能との出会い
➔クリエイティブが刺激される場所

・レガシーメディアと新興プラットフォームの“融合”理想のかたち

責了
三校
初校

今月のRE-PUBLISH
ウェブで人気の記事をお届けします

得意先 文藝春秋
品名 文藝春秋 5月本誌（本文13Q） 3印
原稿 ／ 版 ／ 見本

新婚旅行で南極に行って海パンで飛び込んだ話

岡田悠（旅ライター）

2020.03.02配信

「極地」に行ってみたかった。心震える響きだ。探検家でも冒険家でもないただの旅好きの会社員にとって、その唯一のチャンスは新婚旅行だった。幸い奥さんも乗り気だったので、有給と正月休み、そして結婚休暇を組み合わせるという「会社員の本気」を発動して、南極への旅を決行した。

アルゼンチンの南端まで飛行機で移動し、そこから船で「ドレーク海峡」という世界で最も荒れる海を越える。立ってもいられないほどの揺れが二日間続き、ようやく南緯六十六度三十三分、南極圏に到着した。

見渡す限り青と白だけの世界。まるで地球が裸になったみたいだ。この星で唯一、どの国にも属さない大陸。三千万年の間に降り積もった雪が、数千メートルの厚さの氷となってそびえる果て。剝き出しの自然を毎日心ゆくまで楽しんだ。そんなある日、船内放送で奇妙なイベントが案内された。

「ポーラー・プランジを始めます。希望者はデッキに集まってください」

英語でポーラーには南極、プランジには飛び込みの意味がある。不安を抱きつつ海パンにバスローブを羽織って外に出ると、既に同じ格好の乗客たちが並んでいた。隣のトルコ人が言うには、なにやら南極にも温泉が湧いている箇所があって、そこに飛び込むんだとか。湯ならば安心だと話していたら、突然前方から叫び声が聞こえた。

なぜ叫び声なのか。どういう温泉だ？　しばらくしてタオルにくるまった男性が震えながら歩いてきた。叫び声の主らしい。感想を尋ねると、男性は「Crazy…」と呟きそのまま去っていった。残された我々に恐怖が走る。

ついに順番が回ってきて、前方の景色が開けた。眼下には透き通った海に巨大な氷がのっぺりと伸びていて、見事な青と白の世界。しかしこれは昼に見た南極と同じである。温泉は？　温泉はどこ？　水温はいくつだとスタッフに尋ねると、笑顔で「Zero!」と親指を立てた。温泉は誤報だった。

スタッフは僕のバスローブを剝ぎ取り、荒々しく腰紐を巻きつける。そしてOKと肩を叩いた。全然OKではない。泳げないんだけど。そう伝えても彼は片言の日本語で「ダイジョブ！」とまた笑った。陽気すぎる。そしてそのままカウントダウンが始まる。もう覚悟を決めるしかなかった。

五、四……世界が静止し、思考が盗れ出す。

そういえば。昔は結婚のメリットがわからなかった。一人の方が気楽だと思っていたから。

三、二……冷えた脳みそが回転を続ける。

それでも結婚したのは、二人の方がランジと似ているかもしれない。南極。海に飛び込むことにメリットはないけど、それでもやっぱり飛び込むんだ。

一、〇。

透明な海を沈んでいく。不思議と冷たさは感じない。海中で目を開くと、巨大な氷塊があった。そこには深い亀裂が走っていて、よくみると中には暗い暗い闇である。青と白の狭間にあるその黒色は、三千万年が作り出した芸術だった。吸い込まれるような美しさに思わず手を伸ばそうとしたところで、ぐいと腰に引力を感じて、そのまま力強く船に引き上げられた。

腰紐を引かれアシカみたいにベロンと打ち上がった僕は、そこで初めて猛烈な寒さを覚えた。慌ててタオルを羽織って「Crazy…」と呟きながら船内に駆け込み、ウォッカを流し込む。冷えた内臓に燃えさかる酒が染み渡った。

船が出発する。窓には相変わらず青と白の景色が広がっていたが、それは昼に見た姿とは異なっていた。脳裏には幻想的なあの黒のイメージがまだ焼き付いていて、それがこの大陸の鮮やかさをより際立たせていた。

自然のまま、心の赴くまま飛び込んでいく。その先が温泉じゃなくたって、きっと違った色を見ることができるだから旅はやめられない。

シェアしたくなる教養メディア
文藝春秋digital
bungeishunju.com
『文藝春秋』をスマホで!
月額900円で特集記事が読み放題（※一部掲載されない記事があります）
充実のオリジナルコンテンツも配信中

イラストレーション：Kanabemouse.art

DE205003 B01.indd すべてのページ
20/03/25 14:59
1個のQRコードが検出されました。

責了
三校
初校
From 文藝春秋digital
新婚旅行で南極に行って海パンで飛び込んだ話
岡田悠（旅ライター）
2020.03.02配信

From 文藝春秋digital
新婚旅行で南極に行って海パンで飛び込んだ話
岡田悠（旅ライター）
2020.03.02配信

「noteでサブスク」よくなかったこと

・個人も法人も（プロもアマも）ページの見た目が同じ

・（サブスク全体に共通する課題だが）送客エンジンをどうするか
➔ソーシャル基盤がないと伸びない

「noteでサブスク」今後の展望と課題

ありがとうございました！